

漫画 で 考えよう

もしも、授業に

聴覚障がいのある

学生がいたら…

「多様性 × Forum Theatre × マンガ
～実践について考えよう！～
ワークショップの成果物



目次

まえがき

I) 教員編

話す相手はどなた？

コンビならできますよ

みんないろいろなんですよ

II) 学生編

とある授業の風景

グサッ!

解毒

III) 友達編

ぼくの見解を聞いてよ!

解説

奥付

チラシ

まえがき

本漫画は、聴覚障がいのある学生と担当教員の「もやもや」を題材にしたものである。同志社大学 学習支援・教育開発センターの2022年度教育方法・教材開発費（申請区分A）により実施された「多様性×Forum Theatre×マンガ～実践について考えよう!～」というプロジェクトの成果物である。読者の皆さんにご覧になっていただく前に、プロジェクトの趣旨と漫画の制作過程を説明させていただきたい。

SDGsの普及とともに、DEI（diversity, equity, inclusion 多様性・公正・包摂）は大きな注目を浴びるようになってきている。しかし、どのようにそれらの理念に対する理解を推進したらいいだろうか。単なる知識の伝達ではなく、共感力を養成しようとする啓発教育には様々な落とし穴が潜んでいる。マジョリティ側に対する行き過ぎた啓発は反発を引き起こし、逆効果を生みかねない。また、マイノリティの権利を代弁しようとするあまり、当事者を上から目線で可哀そうな弱者という立場に追い込んでしまう場合もある。啓発教育のこういった課題に対する万能の解決策は存在しないものの、ノンフォーマル教育が示唆に富んだ手法をたくさん提供している。本プロジェクトでは、一つの「実験」として、フォーラムシアターと協働の漫画ストーリー作成を組み合わせたワークショップを実施した。

フォーラムシアターとはブラジルの演出家アウグスト・ボアール氏が1970年代に発案した「被抑圧者の演劇」の一手法で、日常生活の抑圧（差別・ハラスメント等）を題材にした参加型の劇である。観客は劇を観るだけでなく、役者と入れ替わり、自分なりの解決法を舞台で実践する。その後、参加者同士で解決案について話し合う。問題を解決する力をつけることが期待され、ヨーロッパやアメリカで実施されている。本プロジェクトのフォーラムシアターのファシリテーションは、ノンフォーマル教育に精通しているBridge Projectの内山唯日氏が担当してくださった。学生スタッフと話し合った結果、聴覚障がいのあるメンバーが日頃感じる「もやもや」をテーマにすることにした。

マイノリティ・マジョリティを問わず、無神経な発言で相手を傷つけてしまう。また、相手が何気なく発した言葉が、まるで毒矢のように自分の心にグサッと刺さってしまうこともある。こういった経験は、おそらく誰でもしたことがあるだろう。「もやもや」した気分を晴らすためには、気にしないで笑い飛ばすのが一番いいだろうと考えるかもしれない。しかし、それが簡単にできることは、社会のマジョリティの特権かもしれない。社会のマイノリティに属する人にとっては、そう簡単にはいかない場合が多い。というのは、毒矢はしばしば飛んできて、「逃げ場」がないことが多いからである。デラルド・ウィン・スー氏は、悪気無くても、固定観念や先入観によって起こる些細な攻撃を「マイクロアグレッション」と呼び、著書『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（明石書店 2020年）では、それによる被害を指摘している。

フォーラムシアター本番では、聴覚障がいのある学生が教育現場で日頃経験している「些細な攻撃」を様々な場面を通して演じた。参加者と一緒に解決案を演じたりしているうちに、もう一つの課題として浮上してきたのは、担当教員の戸惑いである。善意をもって、配慮するつもりでも、結果として排除してしまう。不慣れのせいで、負担をかけてしまう。筆者も演劇に参加して、

授業で初めて聴覚障がいのある学生を担当した際に覚えた無力感をまざまざと思い出した。学生と教員の両方の「もやもや」をどのように解消したらいいだろうか。万能薬はなくても、演劇で出た意見に基づいて、ヒントだけでもこの場にはいない人にもお伝えできたらという思いで、第二部に臨んだ。

第二部では、プロの漫画家・池乃大氏に相談に乗っていただきながら、協働で漫画のストーリーを考えた。教員編と学生編のストーリーは池乃大氏が作画してくださった。また、「僕の意見を聞いてよ」という漫画は参加者の一人だった辻雪月氏が作成してくださった。メッセージはちゃんと伝わっているのか、作品として分かりやすいのか — 「発信」する難しさを痛感しつつ、皆で議論を重ねた結果として生まれたのが、この漫画である。未熟な点や分かりにくい点などがたくさんあるかもしれないが、独立した作品、または、処方箋ではなく、様々な声が含まれている試作として読んでいただければ幸いである。

漫画界の巨匠の手塚治虫氏は『マンガの描き方』のまえがきで、読者に「あなたも漫画をためしに描いてみませんか」と語り掛け、このように書いている。「ただ描くだけではなく、それによってなにかを訴えたり、見せあって意見を述べあったりすることが、砂漠のように無味乾燥な今の生活の中に、ちょっぴりオアシスの役目を果たせるなら、これにまさる満足はないのである。」（講談社、2004年、5頁）

私たちも、この協働で作った漫画を読んでいただき、気づきが一つでもあったならば、この上なく嬉しく思う。

末筆ながら、構想の段階から本プロジェクトを応援してくださった方々、ワークショップに参加してくださった方々にお礼を申し上げます。特に、いつも相談に乗ってくださった SDA 室の土橋恵美子さんと積極的にこのプロジェクトを支えてくださった学生スタッフの大田竜聖さん、グエン アンジウイさん、朴恕賢さん、藤井亮汰さん、中島大介さんに感謝の意を表す。

プロジェクト責任者
ベティーナ・ギルデンハルト
(グローバル・コミュニケーション学部)

I) 教員編



話す相手はどなた？







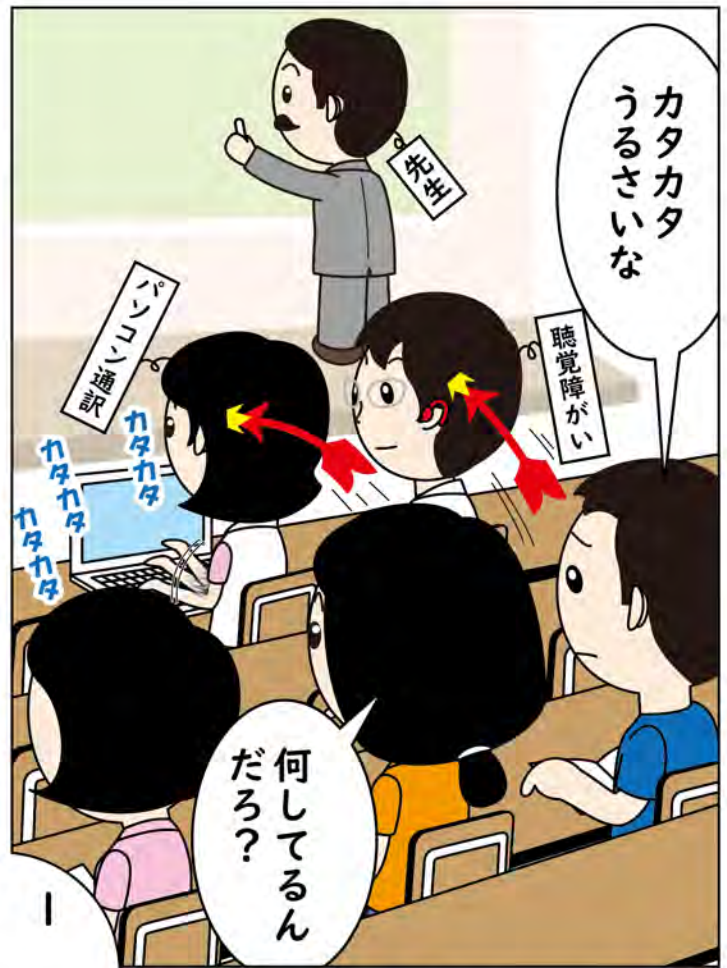
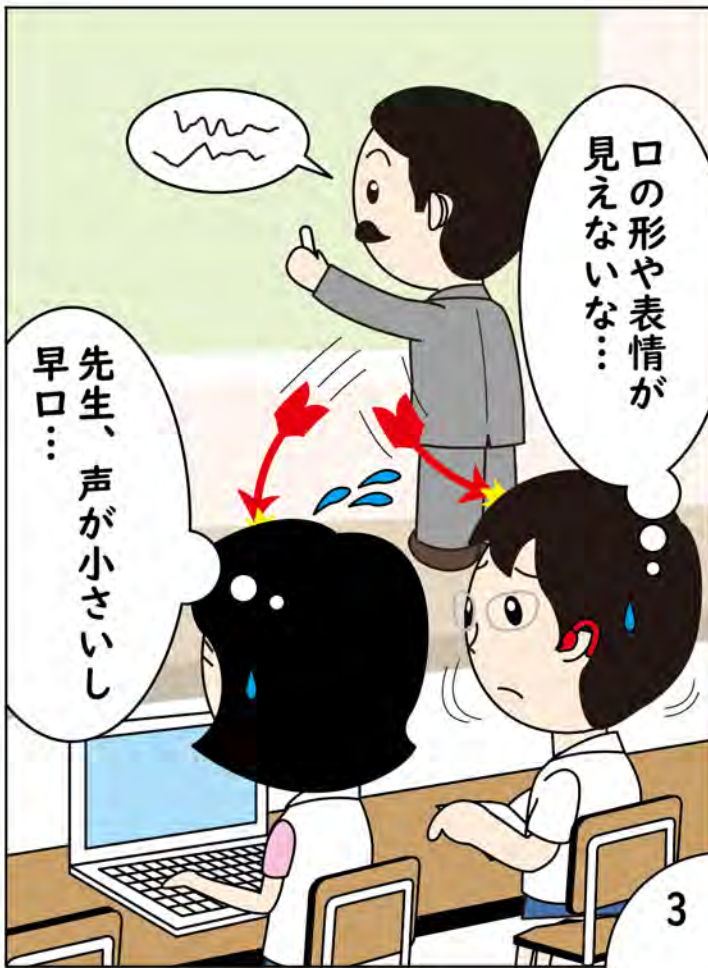
1
2
3
4

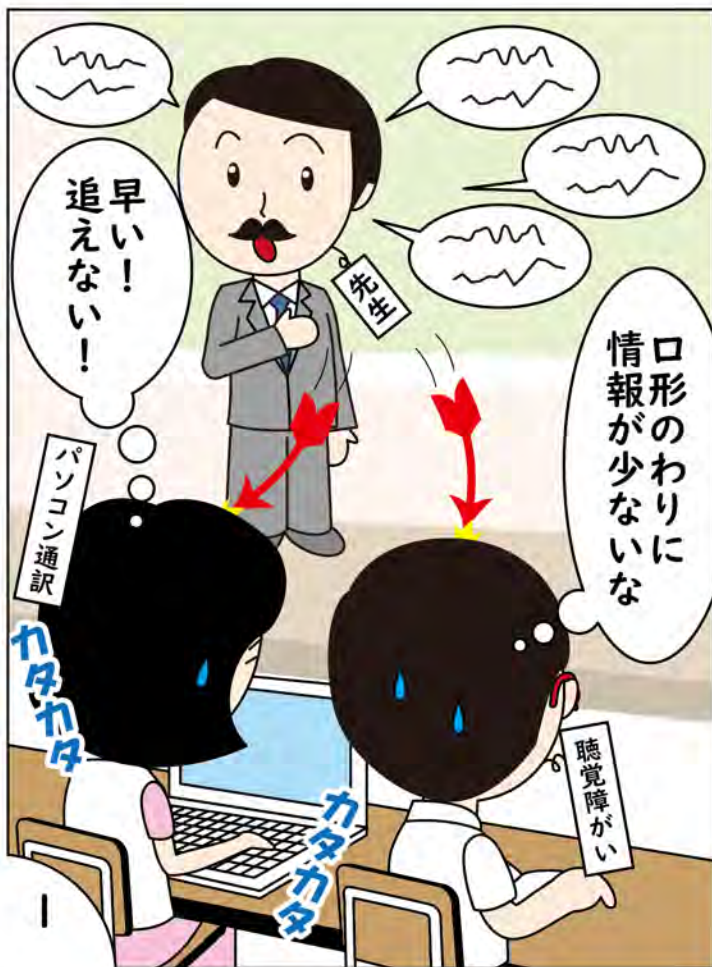


II) 学生編

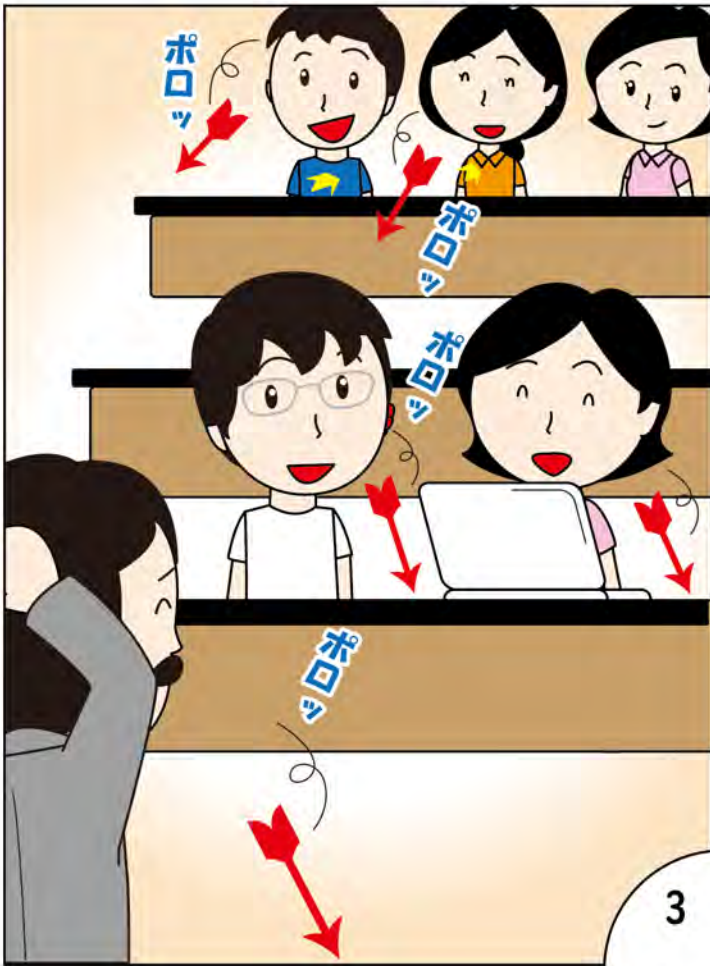


とある授業の風景





解毒



3 1
4 2



III) 友達編





解説

漫画を読んでくださった皆さん、またアンケートに回答くださった皆さんに感謝の意を表す。

文学や漫画の解釈は読者の自由であり、正解・不正解はない。本漫画にも色々な読み方があると思われるが、解説があったほうが良いというご意見をいただいたので、ここで簡単に制作の背景と発信側の意図を説明させていただく。

教員編

「話す相手はどなた？」

言葉が通じないという不安でつい当事者ではなく、支援者に話しかけることがある。些細なことかもしれないが、当事者にしてみれば、まるでこの場にはいないかのような扱いである。その扱いは、積み重なると、強い疎外感につながりかねないということを可視化しようとした作品である。

「コンビならできますよ」

扱い方に対して違和感を覚えた時には、我慢するのではなく、心の声を言葉に出すことの大切さを伝えようとするエピソードである。1970年代に欧米で広まった People first という障がい者の自己権利擁護運動の理念「私たちの事を私たち抜きで決めないで (Nothing about us without us)」に相通じるメッセージ性がある。

「みんないろいろなんですよ」

この作品は、聴覚障がいのある学生のみならず、すべての言語的弱者とのコミュニケーションへのヒントを含んでいる。例えば、外国人に会った時、「ああ、英語で喋らないといけない」と焦ってしまう日本人を時々見かける。しかし、場合によっては、英語は全く必要がなく、かえって「やさしい日本語」や漢字による筆談などのほうが通じることがある。コミュニケーションがうまくいくように、一緒にしないで、当事者一人ひとりのニーズを確かめること、また、当事者自身が自分のニーズを伝えることの重要性を表すエピソードである。

学生編

この3話のシリーズはフォーラムシアターの構成を反映している。フォーラムシアターでは、課題を①抑圧者、②抑圧者(の仲間)、③被抑圧者、④被抑圧者(の仲間)、⑤傍観者という五つの役者に絞って演じる。演劇を通じて、すべての参加者が自省し、決まりきった行動や思考パターンから第一歩を踏み出せるようになることが狙いであるが、本漫画は「傍観者」は何ができるかということに注目している。描かれている授業では、教員と一般学生はいわば「抑圧者」であり、聴覚障がいのある学生とサポートスタッフはいわば「被抑圧者」である。とげとげしい雰囲気は皆にとって「負」の状態であるが、抑圧者は自分達が発している圧力に対して無自覚である。ワークショップでは、様々な解決方法を演じてみたが、雰囲気がガラッと変わったのは、「傍観者」が声をあげた時であった。その疑似体験に基づき、本漫画は「あなたの声は場の空気を変える(場合がある)」というメッセージを伝えている。

もちろん、他の解決方法もたくさんある。アンケートで指摘していただいた通り、パソコン通訳の音がうるさいという問題を解消するのに、教員がマイクを使ったり、通訳がキータッチ音の小さいパソコンを使用したりする方法もある。本漫画は複数あるストーリーの中から一つしか可視化していないが、読者の皆さんが頭の中で異なる展開を思い描いてくれたら、この上なく嬉しく思う。

友達編

この漫画はマイクロアグレッションにどのように対応したらいいのかという課題を取り上げている。ウォーミングアップの一環として行った活動を可視化した作品である。この活動では、Bridge Project の内山氏の絶妙なファシリテーションのもとで「マイクロアグレッションの三角モデル (microaggressions triangle model)」を使って、発信者、受信者、傍観者という三つの役でロールプレイを行った。ロールプレイでは、マイクロアグレッションに対する行き過ぎた反応によって生じる負の連鎖も、巧みな対応による関係者全員の関係修復も疑似体験できた。本漫画は1コマ目では同級生によるマイクロアグレッション、2コマ目ではその場にいた同級生による行き過ぎた反応、3コマ目では当事者の自己主張、4コマ目では関係の修復が描写されている。このストーリーでは、当事者の言動が修復の引き金になっているが、学生編と同様に、もちろん異なるストーリー展開もありうる。

日常における「些細な」問題の解決だけでは、社会全体は変えられない。個人レベルと共に、バリアフリーや積極的格差是正措置など、社会構造の改革に取り組む必要がある。しかし、逆に社会改革という大きな課題にのみ注力すると、目の前の課題を見過ごしたりする場合もある。本漫画は、個人レベルの着眼からスタートして、参加者がフォーラムシアターのワークショップで気づいた点を少しでも伝えようとする試みである。この試みが幅広くDEIについて考えるきっかけになれば、幸いだ。

ベティーナ・ギルデンハルト

参考文献:

Ackerman-Barger, K. and Jacobs, N.N. (2020): “The Microaggressions Triangle Model: A Humanistic Approach to Navigating Microaggressions in Health Professions Schools”, in: *Academic Medicine*, Vol. 95, No 12 / December 2020, p. 28-32.

奥付

漫画作画

池乃大：表紙、I) 教員編、II) 学生編、チラシ
辻雪月：III) 友達編

協働ストーリー作成と編集

大田竜聖(政策学部・3年次生)
グエン アン ジウイ(グローバル・コミュニケーション学部・1年次生)
辻雪月(心理学部・1年次生)
朴恕賢(グローバル・コミュニケーション学部・3年次生)
藤井亮汰(社会学部・2年次生)
中島大介(脳科学研究科発達加齢脳専攻 D1)
土橋恵美子(SDA 室)
ベティーナ・ギルデンハルト(グローバル・コミュニケーション学部)

ワークショップ「多様性×Forum Theatre×マンガ～実践について考えよう!～」

ファシリテーター：Bridge Project 内山唯日

協力：同志社大学学生支援室 スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室(SDA 室)

プロジェクト責任者：

ベティーナ・ギルデンハルト

このプロジェクトは同志社大学 学習支援・教育開発センターの2022年度の教育方法・教材開発費(申請区分A)により実施されたものです。

多様性 × Forum Theatre × マンガ

～実践について考えよう！～

差別やハラスメントを目の当たりにしても、その場で反応できず、悔しい思いをしたことはありませんか？本ワークショップではフォーラムシアターという参加型の劇を通じて、ハラスメントや差別に立ち向かう方法を実践的に学び、一緒に考えます。演劇と話し合いの内容をマンガにして公開し、同志社学内で問題点と解決案を共有します。

フォーラムシアターとは？

ブラジルの演出家アウグスト・ボアル氏が1970年代に発案した「被抑圧者の演劇」の一手法で、日常生活の抑圧（差別・ハラスメント等）を題材にした参加型の劇です。観客は劇を観るだけでなく、役者と入れ替わり、自分なりの解決法を舞台で実践します。その後、参加者同士で解決案について話し合います。問題解決の力をやしなうことができ、主にヨーロッパやアメリカで実施されています。



プログラム

10:00

11:00

12:00

13:00

14:00

15:00

16:00

17:00

第一部

休憩

第二部

フォーラムシアター：
参加型の演劇で日常における

課題について考えよう！

ファシリテーション：
内山唯日（Bridge Project 代表）

マンガのストーリー作成ワークショップ：

第一部のフォーラムシアターの体験に基づいて多様性促進のための啓発マンガを作り、発信について考えよう！

ファシリテーション：
池乃大（漫画家）

ベティーナ・ギルデンハルト（グローバル・コミュニケーション学部准教授）



日時 2022年8月12日（金）

10:00 - 17:00

会場 京田辺校地・多目的ホール

定員 20名（先着順）

プロジェクト責任者：ベティーナ・ギルデンハルト

協力：学生支援センター スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（SDA室）

TEL[京田辺]:0774-65-7411 / E-mail:do-care-stt@mail.doshisha.ac.jp

申し込み

8月3日までに↓

